

認知と文化の対照言語論

—— 日英語飲用動詞の認知的仕組みを求めて ——*

大橋 秀 夫

キーワード：日英語飲用動詞，認知的仕組み，プロトタイプ，スキーマ，咀嚼度 (chewability)，
認知と文化のインターフェイス

1. はじめに

日本語を母語とする話者が外国語である英語を学習する場合，通常，自分の母語である日本語を媒介にして行うが，その際に英語を日本語と比較してさまざまな疑問を抱く。とりわけ，日本語母語話者にとっておそらく最も不思議な疑問は，日本語ではごく自然な（適格な）表現なのに，それに対応する英語ではどこか不自然な（不適格な）言い回しになったり，逆に英語ではごく自然な（適格な）表現なのに，それに対応する日本語ではどこか不自然な（不適格な）言い回しになる，といった日英語間にズレ（食い違い）が生じる事象であると思われる。

本稿では，従来の対照言語学あるいは対照研究では原理だった説明がなされてこなかった，日英語飲用動詞をめぐる，一見素朴ながらも，かなり複雑な事案 (issue) をケーススタディーとして取り上げる。具体的には，英語の飲用動詞 drink は，通例，日本語の「飲む」に対応するとされているが，両動詞は必ずしも一対一には対応せず，さまざまな意味論上または語用論上のズレが生じる。つまり，この興味深いズレは次のような重要な問題を提起する。

* 本稿を作成するにあたり，筆者の学問上の先達である坪本篤朗氏には草稿を精読していただき，忌憚のない貴重なコメントをいただきました。まずもって厚くお礼を申し上げます。また，筆者の長年の畏友である岡村和彦氏，北島利信氏との夜を徹した丁々発止の議論は，大変刺激的で有益であった。ここに記して深く謝意を表したい。最後に，筆者の唯一無二のパートナーである大橋智恵美にはいつも献身的な支援を惜しみなく頂戴した。この紙面を拝借して，心から感謝の気持ちを捧げたい。ただし，本稿の内容に至らぬ点があるとすれば，それは偏に筆者の責任である。

- I. 日英語飲用動詞の間には、一体、どのような意味論上または語用論上のズレが生起するのだろうか。
- II. 日英語飲用動詞の間には、一体、なぜそのようなズレが誘発されるのだろうか。また、そのズレは、何に由来するのだろうか。
- III. 日英語の母語話者は、一体、どのような発想・論理（認知的仕組み）に基づいて、それぞれの飲用動詞を適切に使用しているのだろうか。

ここであらかじめ強調しておきたいのは、この問題事例に取り組むということは、人間の認識のあり方やものの捉え方を探究することに他ならない、ということである。この点に関連して、中右（2004）は下記の如く鋭く洞察している。

- (1) 日英語話者はたとえ同じ外的現実を眼前にしても、その状況把握の仕方 (construal) にズレがあり、そのズレが言語表現のなかに反映されるとみる証拠がある。特定の現実の状況を共通の前提としたうえで、日英語話者はそれぞれ、その状況の視覚経験をどのように概念化し、さらには語彙・文法化するか、その対応関係を洗いだすことによってはじめて日英語の比較考量の土俵が整うという段取りである。

(中右 (2004 : 20))

以下では、上記の問題群を認知言語学の意味モデルの観点から仔細に考察しながら、日英語飲用動詞の認知的仕組みおよび日英語母語話者の認知メカニズムを探究していく。その考察を通じて、当該現象の背後に潜む人間言語に共通する普遍的な側面（認知的原理）と相対的な側面（文化的特性）を解き明かしていきたい。

2. 日英語の飲用動詞とは

2.1. 先行研究：鈴木（1973）

本節では、まず日英語飲用動詞に関する代表的な先駆研究として、鈴木（1973）を取り上げる。鈴木は、対照研究における「言語相対主義」の立場から、¹ 日英語飲用動詞の本義をめぐって洞察

¹ 言語相対主義とはいわゆる「サピア・ウォーフの仮説」として知られているが、端的に言うとも、言語が思考や発想に影響を及ぼすという考え方である。つまり、日本語には日本語の思考・発想、英語には英語の思考・発想があり、言語（母語）が異なれば、それが話し手の思考法・発想法、すなわち、ものの見方 (construal) に影響を与えるという説である。この考え方には程度の差があり、大別して「弱い言語相対主義」と「強い言語相対主義」がある。鈴木（1973）の主張は、後述するように、おおむね「強い言語相対主義」の立場を反映していると考えられる。

力に満ちた興味深い主張を展開している。同氏は、ことばの意味や使い方には構造があって、それが言語によって異なっているという立場のもと、まず日本語の「飲む」という動詞の用法を次のように分析する。

(2) 「飲む」という行為の対象になるものは、まず水、酒、茶、コーヒーのような液体がくる。しかし、薬もの飲むものであり、これは必ずしも水薬とは限らない。粉薬でも錠剤でものめる。タバコもの飲むと言う。しかしこの時は、明らかに煙を吸うわけである。

このような分析から、第一段階として、日本語の「飲む」は、対象の様態については、ひどく制限がゆるいと言える。つまり液体、固体、気体のどれについても「飲む」と言えるということだ。

(鈴木 (1973 : 10-11))

これに対し、英語の飲用動詞 *drink* は、通例、日本語の「飲む」に対応すると言われているが、両動詞は必ずしも一対一に対応せず、次のようなさまざまな意味用法上のズレが生じると言う。

(3) *drink* できるものには、水、茶、コーヒー、酒等があることは疑いない。ある種のスープにも *drink* が使える。固形物の食物には当然 *drink* は用いない。また粉薬や丸薬を *drink* するとは言えないし、タバコを「飲む」は、*smoke* であって、*drink* ではない。

そこで *drink* とは、対象が「液体」の場合にだけ用いられることばだということがまず分る。

(鈴木 (1973 : 12))

さらに、問題の核心に迫るため、鈴木は次のような興味深い事実を指摘する。つまり、英語の *drink* は、日本語の「飲む」と違い、対象が「液体」のものであっても使えない場合がある、という事実である。

(4) というのも、液体ならば、どんなものでも *drink* を用いてもよいかと言えば、そうではないからだ。たとえば液体の薬、つまり水薬は *drink* と言わず *take* と言う。また本来のみものでない液体、たとえばライター・オイルとか、金属の錆落とし液のような、家庭で使用するものには有害なものが多く、子供が間違っただけで命にかかわるようなものもある。このような液体を入れた容器の外側に、アメリカでは、*fatal, if swallowed* という標示がしてあるのが普通だ。*fatal, if drunk* とは言わないのである。つまり、通常

の飲料でないものや、薬や毒物は、たとえ液体であっても drink は使わないのである。

(鈴木 (1973 : 11-12))

以上の議論から、日英語飲用動詞の構造的な相違に関する鈴木 (1973) の主張をまとめると、次のようになる。

(5) a. **飲む** : 何ものかを、口を通して、かま¹ずに、体内に摂取すること。

b. **drink** : 人の体を維持するに役立つような液体を、口を通して体内に入取れる行為。

(鈴木 (1973 : 12-13))

したがって、鈴木によれば、日本語の「飲む」は、英語の drink と異なり、「摂取する対象の形状や性質に関する制限を全く持たず、むしろ口を通して体内に何かを取入れる仕方に注目していることばだからである (鈴木 (1973 : 13))」と結論づけられている。なお、鈴木が最終的に導き出した上記の結論 (5a, b) は、以下で詳述するように、それを成り立たせている個々のキー概念が必ずしも厳密に定義されておらず、それゆえ明らかに不十分であるということを指摘しないわけにはいかない。

次節では、鈴木 (1973) において論じられている言語相対的な分析を批判的に検証するが、その前に日英語飲用動詞をめぐる議論を具体的事実に基づき再考しながら、当該現象の背後に潜む探究すべき問題の所在 (ありか) を明らかにしたい。²

2.2. 問題の所在 (ありか)

まず、次の文例を飲用動詞の対象 (下線) に着目しながら観察してみよう。当該動詞の対象は、その性質によって三種類のカテゴリーに下位分類することができる。

[対象 : 液体 (liquid)]

(6) a. Oh, my! They're **drinking** beer from the bottle.

b. わあ! ビールをらっぱ**飲み**してる。

(『日本語キーワード英語表現辞典』1997 : 517, 三省堂)

² 廣瀬 (2003) は、日英語における「水」と water をめぐる鈴木 (1973) の言語相対論的な主張を取り上げ、それを認知主義の観点から批判的かつ実証的に論じている。小論においても、日英語飲用動詞の認知的仕組みをめぐって、鈴木の主張を批判的に検証しているが、この点に関しては廣瀬 (2003) の知見に負うところが大きい。

- (7) a. I **drink** vegetable juice every morning.
 b. 私は毎朝野菜ジュースを**飲む**。
 (『研究社新和英大辞典』第5版, 2003:2061, 研究社)
- (8) a. She **drank** the milk hot.
 b. 彼女は牛乳を暖めて**飲んだ**。
 (『コンパスローズ英和辞典』2018:542, 研究社)

[対象：固体 (solid)]

- (9) a. *Oops! I just drank my gum (by mistake).
 b. しまった! (誤って) ガムを**飲み**込んだ。
 (『日本語キーワード英語表現辞典』1997:517, 三省堂, 一部変更)
- (10) a. *You must remember to **drink** your medicine after mealtimes.
 b. 食後にちゃんと薬を**飲む**んですよ。
 (『日本語キーワード英語表現辞典』1997:516, 三省堂, 一部変更)

[対象：気体 (gas)]

- (11) a. *My uncle **drinks** more than twenty cigarettes a day.
 b. 私のおじは1日に20本以上もたばこを**飲む**。
 (『ルミナス英和辞典』2001:1658, 研究社, 一部変更)
- (12) a. *The sheer beauty of the sea **drank** my breath away.
 b. 海的美しさに私は息を**飲む**ばかりであった。
 (『ランダムハウス英和大辞典』1994:342, 小学館, 一部変更)

日英語の飲用動詞は、その対象物のカテゴリー（液体・固体・気体）によって両言語の対応関係に明白な違いが生じる。具体的には、(6)-(8)などの液体 (liquid) を飲用する場合は、日本語の「飲む」と英語の drink はどちらも適格である。すなわち、日英語の飲用動詞は一對一に完全に対応する。ところが、(9)-(10)などの固体 (solid), (11)-(12)などの気体 (gas) を飲用する場合は、日本語の「飲む」は適格であるが、英語の drink は不適格である。すなわち、日英語の飲用動詞は一對一に対応せず、明らかにズレが生じていることがわかる。では、なぜこのようなズレが生じるのだろうか。このズレは、一体、何に由来するのだろうか。この根本問題については、第4節の本論で解決策を提示したいと思う。

ここまでの観察をわかりやすく図表化してまとめると、次のようになる。

(13) 通説 (定式化) I

◆英語の drink は、その対象が〈液体 (+liquid)〉の場合にのみ使われる動詞であるのに対し、日本語の「飲む」は、その対象が液体 (+liquid)・非液体 (-liquid) に関係なく使われる動詞である。

日本語	対 象	英語
飲 む	液 体 (liquid)	<i>drink</i>
	固 体 (solid)	
	気 体 (gas)	

前節の鈴木 (1973) が主張するように、英語の drink は、日本語の「飲む」と違い、その対象が〈液体 (+liquid)〉でなければならない。換言すると、前者は、後者とは異なり、非液体 (-liquid) である固体 (solid) や気体 (gas) をその対象として取ることができないことがわらう。

さらに観察を広げると、鈴木が指摘するとおり、通説 I には明らかな反例が存在することがわかる。つまり、対象が〈液体 (+liquid)〉であっても、上記の定式化 (13) に反して drink が使えない場合があるのである。下記の文例を観察していただきたい。

(14) a. *HARMFUL OR FATAL IF DRUNK.

b. 万一飲み込むと有害で、死に至ることがあります。

(『ビジネス技術 実用英語大辞典』1998: 302, 紀伊國屋書店, 一部修正)

(15) a. *He killed himself by drinking insecticide (pesticide).

b. 彼は農薬を飲んで自殺した。

(『研究社新和英大辞典』第5版, 2003: 1063, 研究社, 一部修正)

ここで着目すべきは、当該動詞の対象となっている「毒物 (poison)」や「農薬 (insecticide)」の部分である。鈴木 (ibid.) は、人体に〈有害な (+harmful)〉ものは、たとえそれが液体 (+liquid) であっても、英語の drink は使えないと主張した。この観察を踏まえて、日英語飲用動詞の本義をめぐる鈴木の主張を図表化してまとめると、次のようなものにならう。

(16) 通説 (定式化) II

◆英語の drink は、その対象が人体に〈無害 (-harmful)〉の液体 (+liquid) の場合にのみ使われる動詞であるのに対し、日本語の「飲む」は、その対象が液体 (+liquid)・非液体 (-liquid) および有害 (+harmful)・無害 (-harmful) に関係なく使われる動詞である。

日本語	対 象		英語
飲 む	液 体 (+liquid)	無害 (-harmful)	<i>drink</i>
		有害 (+harmful)	
	固 体 (solid)		
	気 体 (gas)		

上記の「通説（定式化）Ⅱ」が示すとおり，日英語の飲用動詞には一見ただけで〈有害性 (±harmfulness)〉の概念が対照的に関与していることがわかる。つまり，英語は，日本語と違って，「有害 (+harmful)」と「無害 (-harmful)」を厳密に区別するのである。

しかしながら，上述の分析は，筆者の知りうるかぎり，現状では一般に広く認められている説であると考えているが，この通説には，次節で詳述するように，看過すべからざる反例が少なくとも二つ存在すると思われる。つまり，鈴木によれば，英語の *drink* は，日本語の「飲む」と異なり，その対象が〈液体 (+liquid)〉および〈無害 (-harmful)〉である場合にのみ使われると主張されているが，この両条件を満足しているにもかかわらず，通例，*drink* とは言わないものがある。その代表例が，次節で取り上げる① *medicine* 「薬」と② *soup* 「スープ」をめぐる事象である。それぞれ仔細に検証することにしよう。

3. 検証

3.1. 論点 1 : *drink medicine* をめぐって

一つ目の事案は，「薬 (*medicine*)」に関するものである。一般的に，薬は 2 種類のタイプに分類できる。一つは，丸薬 (*pill*)，錠剤 (*tablet*)，カプセル剤 (*capsule*) などの固形薬 (*solid medicine*) であり，もう一つは水薬 (*liquid medicine*) である。次の日英語の文例を比較していただきたい。なお，(20a) における文頭の記号「%」は英語母語話者の容認度・許容度に揺れがあることを表わす。

[丸薬 (*pill*)]

(17) a. *She **drank** the sleeping pills.

b. 彼女は睡眠薬を飲んだ。

(『ジーニアス英和辞典』第 5 版，2014 : 1588, 大修館)

[錠剤 (tablet)]

(18) a. ***Drink** two tablets of aspirin for your headache.

b. 頭痛にはアスピリンを2錠飲んでください。

(『ジーニアス英和辞典』第5版, 2014: 2114, 大修館, 一部修正)

[カプセル剤 (capsule)]

(19) a. *He **drank** a yellow-and-red capsule after supper.

b. 彼は夕食後黄色と赤のカプセルを飲んだ。

(『ジーニアス英和大辞典』2001: 2165, 大修館)

[水薬 (liquid medicine)]

(20) a. %Make sure you **drink** this liquid medicine after each meal.³

b. 必ず毎食後この水薬を飲んでください。

(市橋 (2013: 1130), 英米人インフォーマント)

上記の対比が例証するとおり、日本語においては、(17)–(20)の各(b)文がすべて適格であることからわかるように、薬を服用する場合、固形薬・非固形薬(±solid medicine)に関係なく、一貫して「飲む」という動詞を使うことができる。これに対し、英語においては、(17)–(19)の各(a)文がすべて不適格であることからわかるように、薬を服用する場合は、その種類に如何にかかわらず、通常、drinkと英訳できず、それ以外のさまざまな関連動詞(例えば、take, swallowなど)を適宜使い分けしなければならない。

ところが、問題は、(20a)におけるdrinkの対象が、液体の薬であるliquid medicineの事案である。筆者が英語母語話者に調査したところ、下記の結果(21)が示すように、英文(20a)におけるdrinkの容認度・許容度に関しては微妙な揺れが見られる、ということである。

(21) (20a)の適格性に関する英語母語話者のジャッジメント結果

自然	やや自然	やや不自然	不自然
0人	2人	2人	0人

³ (20a)のジャッジメントに関して、Melisanda Berkowitz氏には大変丁寧なコメントをいただいた。ここに記して、謝意を表したい。それによれば、「takeが最も自然であるが、drinkが使えないわけではない。やはりliquid medicineは普通の液体とは異なるので、若干違和感を覚える。drinkはswallowより自然に感じる」という。また、「すでに口に入っているものに対してswallowが自然であるが、まだ口に入っていないものに対して使うと不自然に感じる。飲み方や液体の量によっても(drinkは)自然に感じる度合いが違う」とのことである。さらに、インターネット上の英語母語話者も、(20a)の容認可能性については、“I could understand, but it is strange.”などと判断している。

この結果は、次のような問題を提起する。一つは、当該動詞の対象である liquid medicine は基本的に〈飲める (drinkable)〉液体であり、鈴木の実験に從えば、英語の drink は許容されるはずであるが、(21)の結果はこれに抵触する。つまり、「やや自然」と回答する英語話者も一部いるものの、「やや不自然」と回答する英語母語話者が確かに存在することから、液体の medicine に対しては、英語話者は drink を使うことにある程度違和感や抵抗感を持っており、ごく普通には同飲用動詞を使わないということがわかる。この事実はどうのように原理的に説明すればよいのだろうか。もう一つは、(20a)のジャッジメントをめぐって、英語話者の間で容認度・許容度に微妙な「揺れ」が存在するという言語事実は、前述の鈴木の実験に対する明らかな反例となるのであるが、この事実は、一体、何に由来するのだろうか。

この謎を解くためには、液体の薬 (liquid medicine) と通常飲用する (milk や juice などの) 液体 (beverage) との差異に注目する必要がある。前者は、後者と違い、必ずしも健康に良いわけではない。周知の如く、一般的に薬というのは、たとえ適正に使用しても、人の病気を治す「効果 (benefit)」だけでなく、「副作用 (risk)」がある。言い換えれば、人体に何らかの悪影響を及ぼす副作用をなるべく抑えて、その効果を最大限引き出すこともできるが、副作用のない薬はないと言われている。⁴ つまり、問題の liquid medicine 「水薬」は飲める (drinkable) 液体ではあるが、それは人の健康を回復するのに役立つ液体であって、日常生活において健康の維持・増進を目的に摂取するものではない。よって、同液体は、日常的に人の健康を維持・増進するのに有用な (+healthy) 液体ではないので、英語の drink は「やや不自然」と判断されるのではないかと推察されよう。

以上の考察を踏まえて、鈴木が主張する「有害・無害 (±harmful)」という概念に基づく通説 II に対して、人の健康を維持・増進するのに有用か否か (±healthy) という認知論的な観点から提案を提出すると、次のような定式化になるだろう。

(22) 日英語飲用動詞の認知原理 I

◆英語の drink は、その対象が《健康の維持・増進に有用 (+healthy)》な液体 (+liquid) の場合にのみ使われる動詞であるのに対し、日本語の「飲む」は、その対象が液体・非液体 (±liquid) および健康の維持・増進に有用か否か (±healthy) に関係なく使われる動詞である。

⁴ 独立行政法人の医薬品医療機器統合機構が運営する「医薬品副作用被害救済制度」によると、次のように摘記されている。「お薬は正しく使っていても、副作用の起きる可能性があります。万一、入院治療が必要になるほどの健康被害がおきたとき、医療費や年金などの給付をおこなう公的な制度があります (抜粋)」。

日本語	対 象		英語
飲 む	液 体 (+liquid)	健康の維持・増進に有用 (+healthy)	<i>drink</i>
		健康の維持・増進に無用 (-healthy)	
	固 体 (solid)		
	気 体 (gas)		

したがって、日英語飲用動詞には、〈液体・非液体 (±liquid)〉の概念に加えて、《健康の維持・増進に有用／無用 (±healthy)》という認知的概念も対照的に関与していることがわかるであろう。なお、上記の定式化は一部、岡村和彦氏のご指摘に負っている。

3.2. 論点2：drink soup をめぐって

次に、日英語の飲用動詞が完全な対応を示さず、ズレが生じるもう一つの事案がいわゆる「スープ論争 (soup controversy)」と呼ばれる興味深い論点であるが、それは、概略、次のようなものである。

- (23) 日本語の「飲む」は、通常、英語では drink と訳すのに、例えば、対象が soup 「スープ」の場合には、通例、英語話者は eat (*drink) soup と言うのに対し、日本語話者は「スープを飲む (*食べる)」と表現するが、それはなぜなのか。この相違は、一体、何に由来するのか。⁵

常識的には、問題の soup もまた、coffee や wine などと同じように、基本的に液体状のものに違いないので、動作としては eat soup よりはむしろ drink soup を期待するのが自然な道理である。しかるに、実際にはそうはなっていないのであるが、それは一体なぜなのかという問題をめぐって、今現在でも少なからぬ論議を呼んでいるのである。そこで、論点をより明確にするため、一般的な英和辞典では、drink (soup) に関する用法はどのように定義・記述されているのか、その文法的・語法的解説を下記に引用してみよう。

⁵ この点に関して、インターネット (<https://www.sujahta.co.jp>) によると、日本語と同じ「スープを飲む」と表現するのは中国語だけであり、ドイツ語、フランス語、スペイン語、ロシア語、韓国語などでは、英語と同じ eat soup 「スープを食べる」と表現すると言われる。なお、中国語と韓国語は、日英語とも異なり、「スープを飲む／食べる」の両方を許容する言語であると見做す事実が存在するという（北島利信氏（個人談）のご指摘による）。

- (24) 液体に直接口をつけて飲むのは drink, 丸薬などのような固形物を丸ごと飲むのは swallow, スープなどの液体（固体が入っているものもあるが）をスプーンなどの食器を使って飲むのは eat, 茶, コーヒーなどを飲む一連の動作全体をいうときは have, 薬を飲むのは take という。

（『研究社新英和大辞典』2002：743, 研究社）

- (25) 液体であってもスープをスプーンで「飲む」場合は eat, 薬を「飲む」場合は take が普通。have (eat, *drink) some tomato soup 「トマトスープをいくらか飲む」。スプーンを使って飲む場合は drink は用いない, カップから直接飲む場合は drink。

（『ウィズダム英和辞典』2003：604, 1916, 三省堂）

- (26) drink は「〈人・動物が〉（飲み物を）飲む」が中心義。水・コーヒー・酒など（が対象）の液体を飲む。[語史]「液体を飲む」が原義。ふつうスプーンなどを使わずに直接容器から飲む。薬は take。

（『英語多義ネットワーク辞典』2007：290, 小学館）

- (27) drink は「液体を飲む」意味の最も一般的な語。eat (have, take, *drink) soup with a spoon 「スプーンでスープを飲む」（カップから直接飲む時は drink (sip) soup も可）。

（『ジーニアス英和辞典』2014：646, 1997, 大修館）

- (28) drink 「液体を口から直接飲む」, eat 「スプーンなどを使って飲む」, have 「茶・コーヒーなどを飲む」, take 「薬を飲む」。「スープを飲む」に相当する英語は, スプーンを用いて口に入れるときには eat soup, 直接 cup から飲むときには drink soup。

（『コンパスローズ英和辞典』2018：542, 1769, 研究社）

さらに面白いのは、英語母語話者の間でも drink soup の容認度・許容度に関して意見が分かれており、drink soup を容認する立場のいわゆる「drink 派」とそれを否認する立場のいわゆる「eat 派」がかなり拮抗していることである。具体的には、インターネット上において、下記のとおり、英語ネイティブ（スピーカー）の生のコメントが掲載されているので、一部抜粋することにしよう。

- (29) Although you can often drink thin soups, we generally say “eat soup”. An exception may be made here for thin soups that are served in mugs. In such an event I would say something like “Drink your broth/tomato soup”.

（インターネット <https://forum.wordreference.com/threads/eat-drink-soup>）

- (30) I was taught as a child always to say “drink soup” rather than “eat soup”, regardless of whether spoons were involved. I’m pretty sure I still do. (*ponders...*) Yes – I eat stew, but I drink soup.

(インターネット ibid.)

- (31) It pretty much depends upon a) receptacle b) how you’re consuming it. If it’s in a bowl and you’re spooning it into your mouth, or dipping bread in it and eating the bread, then you’re eating soup. If it’s in a mug/carton/thermos and you’re pouring it into your mouth like you would with a drink, then you’re drinking soup. It’s all about the intervention of spoons and bread.

(インターネット ibid.)

以上の英和辞典における文法・語法上の解説およびインターネット上の英語ネイティブの生のコメントは、総じてかなり多くの類似点・共通点を共有しているが、それらをわかりやすく要約すると、おおむね次のような記述になると思われる。

- (32) 水, 茶, コーヒーなどのような「飲める液体」を, それが入っている容器に直接口をつけて体内に取り入れる場合は, drink を使う。しかし, スープなどのような「飲める液体」を, それが入っている容器に直接口をつけず, スプーンのような〈道具 (**instrument**)〉を用いて間接的に体内に取り入れる場合には, drink ではなく eat と言う。⁶

上記 (32) が一般的に採用されている通説であると考えられるが, それは, 端的に言えば, 英語話者は道具を使うか使わないか [±道具 (±instrument)], という道具の介在の如何によって drink と eat を使い分けている, ということになる。よって, 英語の drink という動詞はスプーンのような「道具」を用いる場合には使えないので, soup などのような対象物に対しては drink ではなく eat と言うことになろう。

しかしながら, このような通説には明白な反例がある。というのは, 下記文例が示すように, drink という動詞は, 〈道具〉の有無に関係なく, その対象が(純粹)液体の場合には疑問の余地なく使うことができるからである。

⁶ たとえスープが皿に盛られていても, またスプーンを用いる場面であっても, 日本語話者は異口同音に「スープを飲む (*食べる)」と表現するだろうと思われる。

- (33) a. He **drinks** lemonade through a straw.
 b. 彼はストローで レモネードを飲む。
 (『コンパスローズ英和辞典』2018: 1830, 研究社, 一部修正)
- (34) a. Some schoolgirls just killing time were **drinking** (*eating) coffee with a spoon at a café.
 b. Some schoolgirls just killing time were **drinking** (*eating) fresh juice through a straw at a café.

(英語話者インフォーマント)

これらの例文では、スプーンやストローなどの道具を用いて飲んでいるにもかかわらず drink が使われている。よって、道具の介在の有無 [±道具] によって、drink が使えるか否かが決まるわけではないことがわかるであろう。

しかも、通説 (32) は、次節で論証するように、上述の「スープ論争」の本質を正しく捉えていないという重大事案がある。つまり、この複雑多岐にわたる問題 (謎) を解くためには、下記に提起する三つの根本的な問いかけに原理的かつ統一的に答えなければならない。

- (A) 第一に、drink 「飲む」というのは、本質的に、何によって決まるのか。そもそも「飲み物 (beverage)」とは、一体、何ものなのか。
- (B) 第二に、eat 「食べる」というのは、本質的に、何によって決まるのか。そもそも「食べ物 (food)」とは、一体、何ものなのか。
- (C) 第三に、drink 「飲む」と eat 「食べる」の相違、さらに突き詰めると、「飲み物」と「食べ物」の相違は、本質的に、何に由来するのか。

どのような理論であれ分析であれ、これらの根本的な問いかけに対して原理的かつ統一的な解が与えられなければ、日英語の飲用動詞「飲む」と drink の本義 (仕組み) を完全に解明できたことにはならないのである。

4. 考察

4.1. はじめに

NHK の人気番組「プラタモリ」に出演中のタモリが、当該事象の真理にかかわる次のような面白い指摘をしていた。

(35) うどんは「食べる」ものではなく「のむ」ものだ。

博多生まれのタモリは「博多うどん」が大好きで、香川の「讃岐うどん」はうどんではないと言う。というのは、同氏によれば、腰のある讃岐うどんは(35)の趣旨からうどんではなく、博多うどんのような「噛まずにのみ込める」ものがうどんだからである。(35)の穿った見方から推断して、タモリ自身、日本語の「飲む」という飲用動詞の本質を直感的に気づいていたのかもしれない。

以下では、この示唆に富んだエピソードを念頭に置きながら、日英語の飲用動詞の仕組みについて段階を踏んで解き明かしていくが、その際に極めて重要なことは、上述したように、対照研究における認知的な視点である。とりわけ、廣瀬(2003)は、鈴木(1973)において論じられている言語相対的な分析を批判的に検証しながら、下記の如く正鵠を射た指摘をしている。

(36) 言語の問題を、人間がものごとをどのように理解し経験するかということと結びつけて考えるなら、相対主義の立場を無視することはできないが、制限のない相対主義は言語間の違いを強調するあまり、その違いの背後に、人間言語に共通の認知的仕組みが働いている点を見落としてしまう危険性がある。対照研究が真に有意義であるためには、そのような危険性を避ける必要があることは言うまでもない。そのためは、対照研究における相対主義はしかるべき認知的基盤に支えられなければならない。

(廣瀬(2003:81), 下線は筆者)

次節では、認知言語学の意味モデルに基づいて、日英語飲用動詞に観察されるさまざまなズレを包括的に説明する〈認知原理〉およびそれに依拠する〈認知的仕組み〉を提示したいと思う。

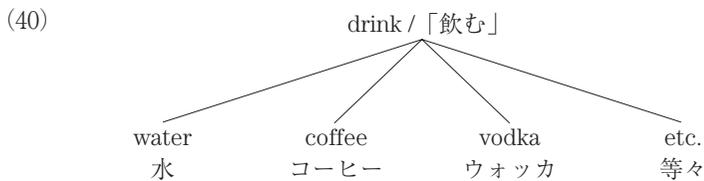
4.2. 日英語飲用動詞の認知的仕組み

日英語飲用動詞の認知的仕組みを解明するためには、認知意味論の領域では不可欠な〈プロトタイプ(prototype)〉と〈スキーマ(schema)〉と呼ばれる中核概念を導入する必要がある(Lakoff(1987), Langacker(1987), 廣瀬(2003), 中右(2004, 2018)などを参照されたい)。それぞれ明確に定義した上で、本稿の分析を明示することにしよう。

まず、プロトタイプというのは、当該カテゴリーを代表する基本的かつ典型的な事例(prototypical example)のことである。そこで、日英語飲用動詞 drink と「飲む」のカテゴリーに帰属(所属)するプロトタイプとえば、通常、次のようないわゆる「純粋液体(pure liquid)」がまず挙げられよう。例えば、water, coffee, vodkaなどがそれに該当する。

- (37) a. The thirsty traveller **drank** a glass of water.
 b. のどのかわいた旅行者は水を一杯**飲んだ**。
- (38) a. I quickly **drank** my cup of coffee.
 b. 私はすばやくコーヒーを**飲んだ**。
- (39) a. They were **drinking** vodka, and they were all of eighteen.
 b. 彼らはウォッカを**飲んで**いたが、みんな18歳であった。

(『英語基本動詞辞典』1980：460, 研究社)



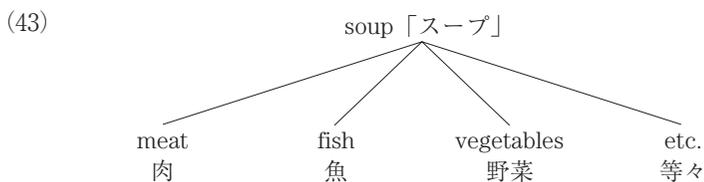
一方、問題となっている soup 「スープ」などの事例はどうなるであろうか。この事例は drink 「飲む」のプロトタイプ、すなわち、それに帰属する代表的成員と言えるだろうか。ここで、下記の soup に関する定義を見ていただきたい。

- (41) Soup is cooked **liquid food**, often containing small pieces of **meat, fish, or vegetables**:
 homemade tomato soup.

(*Longman Dictionary of Contemporary English*, 2009: 1683, 一部修正)

- (42) Soup is **liquid food** made by boiling **meat, fish, or vegetables** in water.

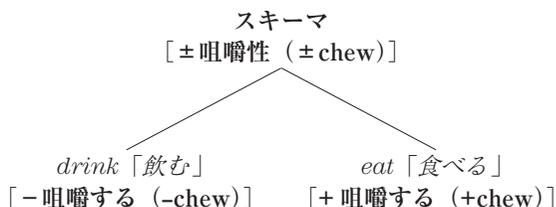
(*Collins Cobuild Advanced Dictionary of English*, 2012: 1497)



これらの定義から明らかなように、soup 「スープ」というのは、基本的に液体の「汁物 (broth)」と固体の「具材 (ingredient)」という複数の要素から構成される混合体であることがわかる。つまり、soup の類は、そもそも「スープ論争」と呼ばれていることからわかるように、前述の（純粋液体のような）帰属度の高いプロトタイプとは異なり、相対的に帰属度の低い非プロトタイプ的な事例であると見做すことができる。このような典型的でないもの、中心的でないものは、認知言語学の標準的な考え方に倣って、「周辺事例 (peripheral example)」と呼ぶことにしよう。

もう一つ、上述のプロトタイプ理論とともに、人間の認知能力の解明に不可欠なキー概念が、Langacker (1987) などが主張する〈スキーマ (schema)〉把握の原理である。スキーマとは、人間言語の重要な基盤を成す、物事を抽象化して捉える一般的なカテゴリー化能力のことであり、より具体的には、ある一つのカテゴリーに帰属する全成員に共通して抽出される「コア・イメージ」のことである。それでは、問題の drink と「飲む」のスキーマとは、一体、何であろうか。本稿では、日英語の飲用動詞 drink と「飲む」をめぐるさまざまな問題を原理的かつ統一的に解決する中核概念として、それぞれと好対照を成す (sharply contrasted) eat と「食べる」の事例と比較分析しながら、次のような《±咀嚼性 (±chew)》というスキーマ概念を導入する必要があると主張したい。⁷

(44) drink 「飲む」と eat 「食べる」のスキーマ



ここで特筆すべきは、私たち人間は生命を維持する基本的な営みとして、飲むこと (drinking) や食べること (eating) を行うわけであるが、両動作には本質的かつ決定的に重要な違いがあり、それぞれ、前者が [-咀嚼する (-chew)], 後者が [+咀嚼する (+chew)] という人間にとって必要欠くべからざる身体的・物理的のプロセスを通して行われる、という認知的視点である。より正確に言うならば、われわれ人間は口の中に入ってくる飲食物 (固形物) を口の中でどのように処

⁷ 本稿が提案する [±咀嚼する (±chew)] という概念については、下記の定義が正鵠を射ていると思われるので、これを参照されたい。

(i) 「咀嚼する」の定義

- a. 食べ物をかみ碎き、やがて自分の血とし肉とすること。
(『新明解国語辞典』第7版, 2012: 875, 三省堂)
- b. 食物を細くなるまでよく嚼む (歯で物を押しくだく) こと。
(『岩波国語辞典』第7版, 2011: 857, 岩波書店)

(ii) chew の定義

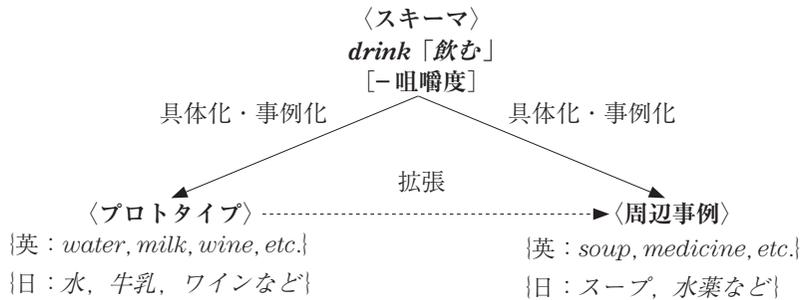
- a. To bite food into small pieces in your mouth with your teeth to make it easier to swallow.
(Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English, 2000: 235)
- b. When you chew food, you use your teeth to break it up in your mouth so that it becomes easier to swallow.

(Collins Cobuild Advanced Dictionary of English, 2012: 254)

理・咀嚼するのか、すなわち、それを咀嚼する度合いを表す《咀嚼度 (chewability)》によって、問題の drink 「飲む」と eat 「食べる」を適切に使い分けているのではないかと考えるのである。つまり、当該動詞の対象物に対し、話し手が「咀嚼度が相対的に低い (-highly chewable)」と知覚・認識すれば、drink 「飲む」が適格であると判断されるが、逆に話し手が「咀嚼度が相対的に高い (+highly chewable)」と知覚・認識すれば、drink 「飲む」は不適格であり、それに代わる eat 「食べる」が適格であると判断されるわけである。⁸

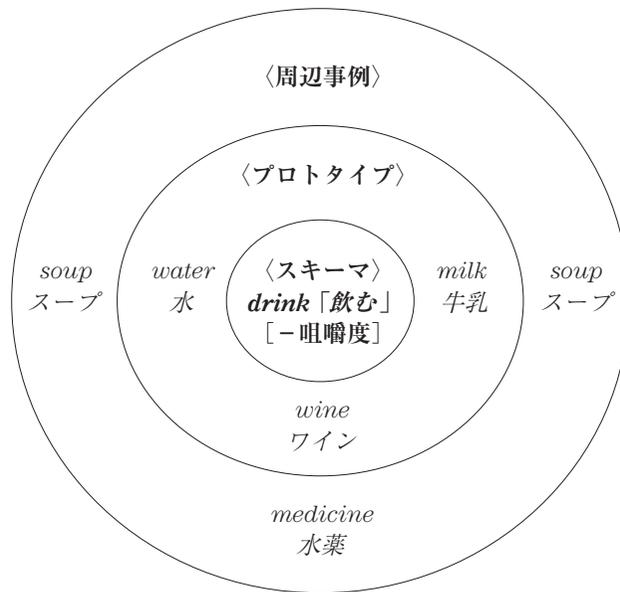
以上の認知言語学の意味モデル、とりわけ、〈プロトタイプ理論〉と〈スキーマ概念〉に依拠した分析に基づいて、日英語の飲用動詞 drink と「飲む」の認知的原理を図式化してわかりやすく提案すると、次のようなものになるだろう (Lakoff (1987), Langacker (1987), 吉村 (2004), 李 (2010) などを参照されたい)。なお、後半の同心円の図式は、中核概念である〈スキーマ〉を中心に放射状に広がる構造を示したものであるが、同図式は前半のいわゆる「カテゴリー化の三角形 (関係性)」をよりダイナミックに、すなわち、より連続的かつ複合的に捉え直したものである (坪本篤朗氏のご指摘にもとづく)。

(45) 日英語飲用動詞の認知原理 II ⁹



⁸ 本稿が提案する《咀嚼度 (chewability)》にはいわゆる「連続性 (Non-discreteness)」の概念を導入しているのであるが、ここでは〈±咀嚼性 (±chew)〉の連続的・高低的变化 (±highly chewable) を示している (岡村和彦氏 (個人談) のご指摘による)。この概念はさまざまな言語現象を説明する上でも、人間の認知メカニズムを解明する上でも極めて重要かつ有用なものである (Ross (1973), 吉村 (2004), 大橋 (2015) など参照されたい)。

⁹ drink 「飲む」の〈スキーマ〉として、例えば、[+喉を潤す] という概念を提案することも可能であるが、この代案には少なくとも二つ問題点があると思われる。一つは、定義の問題である。詳述する余裕はないが、この [+喉を潤す] という概念を厳密に定義するのは相当な困難を伴うと思われる。もう一つは、説明力の問題である。この代案によれば、drink 「飲む」は、概略、「[+喉を潤す] 液体を体内に取り入れる行為」という一般化になると思われるが、そうすると、例えば coffee などの液体は必ずしも「喉を潤す」ものとは言えないので、当該動詞の対象には成れないはずである。ところが、drink coffee は完璧に容認可能である。



本題に戻ろう。以上のメカニズムに基づいて、第3節で取り上げた二つの論点について原理的かつ統一的に説明すると、次のようになる。まず、第一の論点である drink medicine の容認可能性をめぐる反例について、問題の liquid medicine は本来的に固形物を含まないほぼ「純粋液体」に該当するので、上述の drink の認知原理Ⅱ (45) がその中核として具有するスキーマ概念 [-咀嚼性 (-chew)] には違反しない。しかしながら、medicine 「水薬」という周辺事例は、当該動詞の対象に求められる〈人の健康を維持・増進するのに有用 (+healthy)〉な液体という認知概念を有しておらず、それゆえに、前節で提案した認知原理Ⅰ (22) に抵触するので、drink liquid medicine は「やや不自然 (awkward)」と判断されるのである。

次に、第二の論点である drink soup の容認可能性をめぐる問題については、どのような原理的な説明が可能であろうか。本稿の分析によれば、英語の drink は [-咀嚼性] を求める動詞であり、またそうであるからこそ、drink という動詞を使用するためには、その対象は〈咀嚼する〉必要がないものでなければならない。しかるに、問題の対象物 soup 「スープ」は、繰り返しになるが、基本的に「具材」という固形物を含んだもの(液体)であり、それゆえに、[+咀嚼する (+chew)] という身体的動作を伴わずしてのみ込む (swallow) ことができないものと認識されるわけである。よって、問題の drink soup は前述の認知原理Ⅱに抵触するので、英語話者は当該事例を不適格な表現と判断し、それに代わるものとして [+咀嚼性 (+chew)] を要求する eat (soup) を使用するのである。

ここまでの分析を裏付ける証左・傍証として、一見矛盾すると思われる事例であるが、次のような事例を挙げることもできる。

(46) Don't just pick out the stock. Drink your soup too!

「具ばかり食べてないで、スープも飲みなさい!」

(インターネット)

この文例は、soup「スープ」の具ばかり食べている子供に向かって、親が「スープも飲みなさい (Drink your soup too)」と注意している場面を描写したものである。ここで注目すべきは、本来容認不可能な対象物である soup であっても、それが (46) のような文脈で使われると、興味深いことに、通説に反して、問題の drink soup が許容されるという事実である。では、なぜ上記のような文脈が与えられると、通常容認不可能な drink soup が容認可能な表現に変化するのでしょうか。本稿では、このような一見パラドックスと思われる事例についても、次のように原理的かつ統一的に説明することができる。つまり、この事例に関するかぎり、話し手は、soup 世界における固体の「具材」よりも、むしろ液体の「汁物」の方に焦点 (focusing) を当てて、後者を認知的に「際立った」存在として捉えている (construe) ことがわかるであろう。したがって、当該事例における soup は、通常の [+咀嚼性] という咀嚼を要する「食べ物 (food)」のスープではなく、[-咀嚼性] という咀嚼を要しない「飲み物 (drink)」のスープとして知覚・認識しているので、(46) は上述の認知原理Ⅱに適合し、英語母語話者は drink soup を適格な表現と判断し、使用しているわけである。¹⁰

最後に、前節末で提起した「スープ論争」の本質にかかわる三つの根本的な問いかけに対して、以下の通り、原理的かつ統一的な解を与えることができよう。

(A') 第一に、drink「飲む」というのは [-咀嚼する (-chew)] こと、すなわち、ものを咀嚼しないで口・喉を通して体内に取り入れる行為である。

(B') 第二に、eat「食べる」というのは [+咀嚼する (+chew)] こと、すなわち、ものを咀嚼して口・喉を通して体内に取り入れる行為である。

¹⁰ 一見反例になると思われる事例がある。例えば、最近若い女性を中心に支持されている、タピオカ (tapioca) の入った「タピオカミルクティー (tapioca milk tea)」を挙げることができる。なお、タピオカは「芋の一種であるキャッサバから作る粒状の炭水化物で、かみごたえがあって腹持ちのいい」固形物のことである (『朝日新聞』2019年7月9日)。この事例の容認可能性について、日英語話者はおそらく異口同音に「タピオカミルクティーを飲む (drink) / *食べる (eat)」と表現すると思われるが、この一見矛盾する事実はどのように原理的に説明すればよいのだろうか。というのは、「飲む (drink)」の対象であるタピオカは「噛みごたえのある固形物」と言われているので、前述の soup の場合とほぼ同様に、本来飲用動詞は許容されないはずであるが、この予測は事実と反するからである。本稿の分析では、鈴木 (1973) とは違い、次のように説明することができる。つまり、タピオカミルクティーに混入しているタピオカは適度に「噛む (bite)」ことはあるにしても、それは咀嚼せずとも飲み込める (swallow) 対象であるので、日英語話者は同ミルクティーを [-咀嚼性] を求める「飲む (drink)」として捉えるわけである。

(C') 第三に, drink「飲む」と eat「食べる」の相違は, 畢竟, [±咀嚼度 (±chewability)] の必然的な帰結 (corollary) である。

以上の考察に基づいて, 日英語飲用動詞の「飲む」と drink の認知的仕組み (認知メカニズム) について, それぞれと好対照を成す (sharply contrasted) 「食べる」と eat の同仕組みと比較対照しながら, わかりやすく図式化してまとめると, 次のようなものになる。

(47) 日英語飲用動詞の認知的仕組み

◆英語の drink は, その対象が《健康の維持・増進に有用 (+healthy)》な液体 (+liquid) を, 咀嚼しないで《-咀嚼性 (-chew)》, 口・喉を通して体内に取り入れる動詞であるのに対し, 日本語の「飲む」は, その対象が液体・非液体 (±liquid) および健康の維持・増進に有用か否か (±healthy) に関係なく, 咀嚼しないで《-咀嚼性 (-chew)》, 口・喉を通して体内に取り入れる動詞である。¹¹

日本語	対 象			英語
飲む	- 咀嚼 (-chew)	液 体 (+liquid)	健康の維持・増進に有用 (+healthy)	- 咀嚼 (-chew) <i>drink</i>
			健康の維持・増進に無用 (-healthy)	+ 咀嚼 (+chew) <i>eat</i>
		固 体 (solid)		<i>take</i>
		気 体 (gas)		
食べる	+ 咀嚼 (+chew)	固 体 (solid) 液 体 (liquid)	<i>eat</i>	

¹¹ 本稿の分析を裏付けるさらなる証拠 (証左) として, 次のような文例を挙げるができる。

- (i) a. 雪崩が登山隊をのんだ。
 b. 経営者は組合の要求をのんだ。
 c. 最初から会社は組合をのんでかかった。
 d. (魚の骨が喉にささった時は) ご飯のかたまりをのむとよい。

(『日本語基本動詞用法辞典』1989: 407-408, 大修館)

上例が示すとおり, 日本語の「飲む」は比喩的に [-咀嚼する] を含意する (entail) 場合でも使用することができるのである。

本稿では、日英語の飲用動詞「飲む」と drink の認知的仕組みを求めて考察してきたが、その結果、日英語母語話者は、本質的に、一般的な認知概念に裏打ちされた (44) [±咀嚼性 (±chew)], より正確には、(45) 《咀嚼度 (chewability)》と呼ぶべき一般的な認知原理に依拠しながら、当該動詞を適切に使い分けていることが判明した。

4.3. 認知と文化のインターフェイス

本節では、最後に残された未解決の論点である、日本語話者は、英語話者とは対照的に、なぜ「スープを食べる」ではなく「スープを飲む」と言うのか、という謎を解き明かしてみよう。まずは、下記の実例をご覧ください。¹²

(48) これはお世辞抜きで本当に美味しい。本物のおみそ汁を飲んでいるという感じがします。和食屋さんがつくるおみそ汁にはほぼ近いと思いますね…。

(『朝日新聞』2018年2月19日)

(49) 野菜スープを飲むうちに、シミが薄くなりました。白内障の症状も出ておらず、視界はクリアそのものです。じっくり煮込んだ野菜スープは、シンプルですが、ほんとうにおいしく、無理なく続けられます。

(『朝日新聞』2018年3月10日)

(50) 青森のおみそ汁のおいしさに感動です！普段何気なく飲んでいる味噌汁とはひと味違いますね。もう青森のみそ汁はやみつきです。さすが、賞をとっているだけのことはありますね。

(『朝日新聞』2018年4月8日)

日本語においても、スープ類は基本的に固形物の「具材 (ingredient)」が入っており、それは咀嚼する必要があるので、常識的に考えれば、英語のそれと同じように、eat に対応する「食べる」という無標の (unmarked) 表現が選ばれるのが自然な道理であろうと思われる。しかるに、実際にはそうはなっていないのであるが、それは一体なぜなのか。さらに突き詰めて考えると、英語

¹² よく知られているように、日本語話者はスープだけでなく、もともと味噌汁も「飲む」と表現するが、それでは汁物全般について「飲む」という認識なのだろうか、という疑問がわく。つまり、日本で「汁物」と呼ばれるものは、例えば、豚汁・粕汁・狸汁・泥鰌汁・巻糰汁・薩摩汁・三平汁・納豆汁・しじみ汁など多種多様であるが、味噌汁の場合と同じように、日本語話者はすべて「飲む」と表現するのだろうか。ここでは詳細に立ち入る余裕はないが、(筆者も含めて) インフォーマント・チェックを行ってみると、興味深いことに、「飲む」だけでなく「食べる」も許容する話者が存在する傾向がある、という事実を指摘しなければならない。

話者は基本的に soup という対象に対して eat という動詞を使うことからわかるように、soup を「食べ物 (food)」として捉えているのに対して、日本語話者は対照的なものの捉え方 (construal) をする。つまり、日本語話者は「スープ」という実体に対して「飲む」という動詞を使うことからわかるように、「スープ」を「飲み物 (beverage)」として捉えているのであるが、それは一体なぜなのか。このような日英語話者の捉え方の相違は、本質的に、何に由来するのであろうか。

本稿では、この謎を解くカギは、soup「スープ」をめぐる日本の食文化「和食文化」と英語圏の食文化「洋食文化」との差異にあると考える。具体的には、前者の和食は、後者の洋食とは異なり、その文化的・伝統的価値が認められ、2013年12月に「ユネスコ無形文化遺産」に登録されたが、それによると、次のような四つの主要な文化的特徴を備えている、と国内外において評されている。¹³

- (51) a. 多様で新鮮な食材とその持ち味の尊重
- b. 栄養バランスに優れた健康的な食生活
- c. 自然の美しさや季節の移ろいの表現
- d. 正月などの年中行事との密接なかかわり

(『朝日新聞』2015年2月13日)

ここで特記すべきは、上記 (51a-d) の文化的価値を持つものとして評される日本人の伝統的食生活の源泉は、素材の持ち味を最高に引き立てる《出汁 (だし)》の食文化、《旨味 (うまみ)》の食文化にあり (伏木 (2017), 熊倉 (2020) など参照されたい),¹⁴ この文化的特質が soup「スープ」に対する日英語話者のものの捉え方に決定的な違いをもたらしているのではないかと、という視点である。つまり、日本語話者は、固体である〈具材〉よりもむしろ液体の《出汁》を文化相対的に際立った実体として捉え、そしてそれに焦点を当てるので、この周辺事例に関するかぎり、前者の〈具材〉が相対的に捨象され、それ自体咀嚼を要しない後者の《出汁》を対象とする「飲む」という有標の (marked) 表現を用いるのである。これに対し、英語話者は、前節で詳述したよう

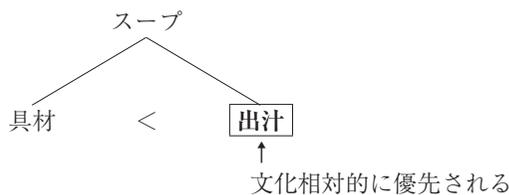
¹³ 和食の魅力を適宜摘記すると、次の如くである。「2013年12月和食の文化的価値が認められ、『和食—日本人の伝統的な食文化』がユネスコ無形文化遺産に登録された。和食には日本文化が集約されている。新鮮な野菜や魚介類の持ち味を活かし、栄養バランスに優れている和食は世界最高の料理の一つだと言われている。和食の基本は鰹と昆布のダシ、鰹や昆布でダシを取るのは和食だけである。そのダシから独特の旨みが生まれ、その満足感によって脂肪分を減らせます… (『朝日新聞』2014年11月27日)」。この点に関しては、熊倉 (2020) も参照されたい。

¹⁴ 伏木 (2017) は、和食の基本は鰹と昆布の出汁であるとし、その「出汁」の魅力や神秘性について、科学面および文化面の観点から詳細に論じている。

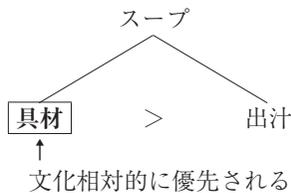
に、液体の〈出汁〉よりも、通常、咀嚼を要する固体の《具材》に焦点を当てるので、drinkではなくeatという無標の(unmarked)表現を用いるのである。言わば、日本語話者は、英語話者とは対照的に、たとえ豊かな〈具材〉がスープの中に入っていたとしても、〈具材〉はあくまでも「脇役(補佐役)」であり、文化相対的に重要な存在である《出汁》が「主役」の役割を担っている、と知覚・認識することができるわけである。¹⁵

以上の考察を踏まえて、懸案事項の日英語母語話者のsoupに対する捉え方の相違を図式化してまとめると、次のようなものになるであろう。

(52) a. 日本語母語話者



b. 英語母語話者



平たく言えば、日英語母語話者は、「スープ」と soup に対する異なる文化的(慣習的)イメージを持っており、それぞれの文化相対的価値観に基づいて、当該動詞の「飲む」と drink, 「食べる」と eat を適切に使い分けられていると考えられる。つまり、日本語話者は、上述したように、《出汁》の方が〈具材〉よりも認知的にも旨味的にも際立っている、という文化的(慣習的)イメージを持っているので、(52a)が示すように、前者が後者に文化相対的に優先される(出汁>具材)。よって、日本語話者は「スープを飲む」と表現するのである。これに対し、英語話者は、日本語話者とは異なり、〈出汁(汁物)〉の中に主役の《具材(固形物)》が入っている、という文化的(慣習的)イメージを持っているので、(52b)が示すように、後者が前者に文化相対的に優先される(具材>出汁)。よって、英語話者は eat soup 「スープを食べる」と表現するのである。

¹⁵ 要するに、眼前にある soup「スープ」は、基本的に〈出汁〉と〈具材〉で構成されており、両者は外見上対等に混ざり合って(融合して)いるように見えるが、日英語話者の「状況把握の仕方(construal)」は同じではないということである(中右(2018)参照)。つまり、本稿の分析では、日本語話者は、英語話者とは違い、主役の《出汁》の中に補佐役の〈具材〉が入っている、という知覚イメージで捉えているのである。

5. おわりに

本稿では、日英語飲用動詞をめぐる不思議な興味深い現象を取り上げ、日英語母語話者は、それぞれ、どのような認知メカニズムに基づいて当該動詞を適切に使用しているのか、認知言語学の意味モデルの観点から、その認知的仕組みを求めて考察してきた。その結果、以下の結論を最終的に導出し、当該現象の背後に潜む人間言語に共通する普遍的な側面（認知的原理）と相対的な側面（文化的特性）を明らかにした。

- (A) 日英語飲用動詞の「飲む」と drink をめぐる鈴木（1973）の（強い）言語相対論的主張は、人間言語に共通の《認知論的視点》を見落としている点で不十分である（(22), (44), (45) 参照）。
- (B) 日英語飲用動詞に関する概念化の背後には、人間言語に共通する一般的な認知原理である〈スキーマ〉と〈プロトタイプ〉という概念に基づく《認知的仕組み》が同じように働いている（(47) 参照）。
- (C) 日英語飲用動詞に関する「周辺事例」をめぐることは、日英語母語話者は、それぞれの文化的特質を投影した《文化相対的価値観》に基づいて、当該動詞を適切に使用している（(52) 参照）。

ここで留意すべきは、日英語における「飲む」と drink, 「食べる」と eat は、それぞれ、概念的には対立しないが、実際上は両者が対立する状況（場面）があるということである。つまり、英語で eat を用いることが前提となるような状況（場面）であっても、上述の文化相対的価値観（57）の要請により、日本語では「食べる」と言わずに「飲む」で表現しなければならない、という表現上のズレが存在する、ということである。最後に、本稿の分析により確かな裏づけを与えるためには、これら以外のさまざまな事象についても統一的に説明できることを立証する必要があるが、この課題については稿を改めなければならない。

参考文献

- 伏木亨 (2017) 『だしの神秘』朝日新聞社, 東京。
- 廣瀬幸生 (2003) 「H₂O をどう呼ぶか—対照研究における相対主義と認知主義—【上】【下】」『言語』6, 7月号, 80-88, 78-87, 大修館, 東京。
- 市橋敬三 (2013) 『話すためのアメリカ口語表現辞典』研究社, 東京。
- 熊倉功夫 (2020) 『和食という文化』NHK出版, 東京。
- Lakoff, George (1987) *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*, University of Chicago Press, Chicago. (池上嘉彦・河上誓作他 (訳) (1993) 『認知意味論: 言語から見た人間の心』紀伊國屋書店, 東京。)
- Langacker, Ronald, W. (1987) “A View of Linguistic Semantics,” *Topics in Cognitive Linguistics*, ed. by Brygida Rudzka-Ostyn, 49-90, John Benjamins, Amsterdam.
- 李在鎬 (2010) 『認知言語学への誘い—意味と文法の世界—』研究社, 東京。
- 初山洋介 (2014) 『日本語研究のための認知言語学』研究社, 東京。
- 中右実 (2004) 「言語と認知と文化のインターフェイス—なぜ in a car なのに on a bus なのか—」『英語青年』9月号, 20-24, 研究社, 東京。
- 中右実 (2018) 『英文法の心理』開拓社, 東京。
- 大橋秀夫 (2015) 「可動性のパラメーター—日英語の借用動詞の仕組みをめぐって—」『言語研究の視座』, 深田智・西田光一・田村敏広 (編), 93-107, 開拓社, 東京。
- Ross, John, R. (1973) “Nouniness,” *Three Dimensions of Linguistic Theory (TEC)*, ed. by Fujimura, O., 137-257, Tokyo.
- 鈴木孝夫 (1973) 『ことばと文化』岩波書店, 東京。
- 吉村公宏 (2004) 『はじめての認知言語学』研究社, 東京。

辞書・辞典

- 『ビジネス技術実用英語大辞典』, 海野文男・海野和子 (編), 1998, 紀伊國屋書店, 東京。
- 『英語基本動詞辞典』, 小西友七 (編), 1980, 研究社, 東京。
- 『英語多義ネットワーク辞典』, 瀬戸賢一 (編者主幹), 2007, 小学館, 東京。
- 『ジーニアス英和大辞典』, 小西友七・南出康世 (編者主幹), 2001, 大修館, 東京。
- 『ジーニアス英和辞典 (第5版)』, 南出康世 (編者主幹), 2014, 大修館, 東京。
- 『岩波国語辞典 (第7版)』, 西尾実・岩淵悦太郎・水谷静夫 (編), 2011, 岩波書店, 東京。
- 『研究社新英和大辞典 (第6版)』, 竹林滋 (編者代表), 2002, 研究社, 東京。
- 『研究社新和英大辞典 (第5版)』, 渡邊敏郎・Edmund R. Skrzypczak・Paul Snowden (編), 2003, 研究社, 東京。
- 『コンパスローズ英和辞典』, 赤須薫 (編)・大西泰斗／ポール・マクベイ (監修), 2018, 研究社, 東京。
- 『日本語キーワード英語表現辞典』, 小泉保・船城道雄・本田晶治・仁田義雄・塚本秀樹 (編), 1989, 大修館, 東京。
- 『日本語基本動詞用法辞典』, 三省堂編集所 (編), 1997, 三省堂, 東京。
- 『ランダムハウス英和大辞典 (第2版)』, 小西友七・安井稔・國廣哲彌・堀内克明 (編集主幹), 1994, 小学館, 東京。
- 『ルミナス英和辞典』, 竹林滋・小島義郎・東信幸 (編), 2001, 小学館, 東京。
- 『最新アメリカ英語表現辞典』, 市橋敬三 (著), 2003, 大修館, 東京。
- 『新明解国語辞典 (第7版)』, 山田忠雄・柴田武・酒井憲二・倉持保男・山田明雄・上野善道・井島正博・笹原宏之 (編), 2012, 三省堂, 東京。
- 『ウイズダム英和辞典』, 井上永幸・赤野一郎 (編), 2003, 三省堂, 東京。
- Collins Cobuild Advanced Dictionary of English, Seventh Edition*, 2012, National Geographic Learning and

Heinle Cengage Learning, USA. (『コウビルド英英辞典 (改訂第7版)』セーラーラーニング, 東京。)
Longman Dictionary of Contemporary English, Fifth Edition, 2009, Pearson Education Limited, UK. (『ロン
グマン現代英英辞典 (5訂版)』桐原書店, 東京。)
Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English, Sixth Edition, 2000, Oxford University Press, UK.

用例出典

『朝日新聞』2014年11月27日, 2015年2月13日, 2018年2月19日, 2018年3月10日, 2018年4月8日, 2019年
7月9日, 朝日新聞社。
インターネット関連情報: <https://forum.wordreference.com/threads/eat-drink-soup> (WordReference Forums),
<https://www.sujahta.co.jp>.